

「三陸・岩月黄金伝説、面瀬一話」

岩月、千岩田地区

面瀬川流域には金取、わっぱ沢、宝ヶ沢など多くの産金と関係深い地名がある。面瀬地区に限らず現在の南三陸町から陸前高田の玉川までほぼ直線的に三陸沿岸に金鉞脈があったことは歴史的事実である。ちなみに現在（西暦二〇一三年）まで世界で生産された金の量は五十メートルプール一杯分というからその希少価値はかりしれない。特に最盛期は平安期の奥州藤原氏の財政的な基盤を支えた。代表的な平泉中尊寺の金色堂は、その真骨頂と言える。さて、上鹿折の白山小学校前を流れる鹿折川上流にも鹿折金山から流れ出たものか、当時の小学生たちが川遊びには、よく砂金を目にしたという。さほどに砂金が川を流れることはよくあるようだ。面瀬川を流れ出た砂金は当然、海岸に流れ出る。比重の重い金は、海岸の砂浜とか藻場に流れ着く。以下の話は元階上公民館長の熊谷勝氏から、面瀬川河口で砂金取りが盛んであったことを聞き及んだことをもとに昔話に創作したものである。なお、熊谷勝氏は千岩田の熊谷一族の子孫である。

岩月村千岩田の千苺田家（屋敷名で姓名は熊谷）は、本吉随一の大百姓である。産業も大いに興し、その資産は何百年使っても余りあるだろうと言われていた。その始祖の千田大学は県内陸の黒川郡からの落ち武者であった。さまざまな経緯を経て慶長、元和（戦国から江戸初期）から当地の金山経営にあたった。千田大学、二代目の同名の大学、三代目の和泉がそれぞれ金山管理者としての金山肝煎となっている。この岩月村の金山は室町期以降衰えていた。しかし、旧来の鉞脈の下部にも金鉞脈があるとのことで再び産金が盛んになったものである。何事も人事に関しては三代と言われている。三代続けばそれ以降は安泰という。卑近な例は徳川三代から十五代だ。これは、何はともあれ上出来な例だ。武家政権初代源氏は、はかなくも三代実朝で減んでいる。千苺田家は三代以降もさらに繁栄した。約百年は繁栄を極めたというから、これは驚きである。「大島の亀山がつぶれるとも千苺田はつぶれず」とは近郷でどどろいた流言であろうか。事実であろうか。

さて、千苺田家も繁栄期に入った四代・清右衛門の頃である。産金は絶頂を極めていた。田畑も拡大し、一大素封家としての清右衛門の名は大いにどろき渡っていた。清右衛門は名望家ではなかった。ただただ先祖以来の身上を増やし、永く伝えることだけを望む男であった。しかし、美あれば醜あり、富あれば貧あり、名声あれば没落のぞむ妬みありである。村で千苺田家の後塵を拝する某家はおもしろく

ない。岩月金山に働く者を引き込んでさまざまな謀略をはたらいた。その一大事件が「金海鼠(きんなまこ)騒動」である。当然肝煎の清右衛門はその家もろとも窮地に陥った。しかし、清右衛門の人徳で解決し、千刈田家はもつと繁盛したという。

某家から金山にもぐり込んだ五郎太は、作業に入って精錬金から作られる金海鼠(きんなまこ・金塊)を鉄製の道具で少しずつ削り取った。そして毎夜、面瀬川に流した。家に持ち帰ってはかえって騒動のもと。金の性質を知っていた某家は、金がよく沈むことを利用したのだ。面瀬川のような弱い流れでは、金は、捨てた場所に沈むことはあっても、海までは流れまい。しかも削り金が川で見つかっても、それは「砂金」であろう、ということとで嫌疑はかからない。そして何より、金奉行が金海鼠の計量で嫌疑を起こせば、これ以上のうまい話はない。清右衛門はおるか一族は、獄門磔(ごくもんはりつけ)



である。削り取る量は微量でも、月日が続けば量は増える。しかも、このころの産金量は金海鼠で十本以上というから驚く。微量でも、合わせはかれば海鼠の減量がわかる。

奉行の川辺三徳は非常に賢い能吏であった。伊達藩士の誇り高くしかし農民庶民を慈しんだ。彼が儒学を深く学んだためであろう。川辺の部下から金海鼠の重さが足りないことを告げられたのは、清右衛門の家に、親しく行き来するようになった頃である。まさかあの実直な清右衛門が金塊を横領するとは、川辺は信じられなかったが、部下の報告も無視できずに金海鼠を計量する宝が沢の藩の金倉に赴いた。そこには清右衛門以下職人一同が蔵前に正座して川辺を待っていた。

「金海鼠の重さに疑義ありとの言上あり、そのこと真であれば岩月金山の一大事、吟味の上藩主に申し上げて沙汰を待つことになる。一同左様心得て取り調べにしたらがうよう心得よ。」

川辺の声はいつにもまして厳しいものであった。川辺は、まず金海鼠一つ一つと、重量の基準となる御影石とを天秤左右にかけて慎重に計量させた。部下の報告どおり

に天秤は御影石の方にやや傾いた。川辺はまず金掘り職人から吟味をはじめたが、どこにも疑う余地がなかった。そして、金海鼠作りの五郎太に吟味が及んだ。川辺は五郎太に問うた。

「そちの出自を申せ。」

「へへえ。手前は熊谷清右衛門様の遠縁のご親戚、某様の甥にあたるものでございます。百姓食い扶持なく、某様から金山にて工人として働くよう申しつけられ今にいたります。」

と五郎太が答申し述べると、川辺は

「何故に金海鼠こさえの役についたのじゃ。きつと金海鼠扱いは清右衛門直系の者にしかできぬはず。」

五郎太は

「いかにもその通りに聞き及びますが、清右衛門様よりわが貧しきくらしに不憫をお感じあり、手間手当の一番多き、この役に



お付けあそばされたやに聞き及びまする。」

川辺は清右衛門をきつと見て、

「清右衛門、ぬしの行状ご法度破りと見えるが、申し述べよ。」
清右衛門はさらに頭を低くして

「左様にございまする。手前は当地肝煎として、ただ千苅田の御領地の豊穰と民百姓の安堵のみ願う者にございます。しかるに遠縁の五郎太が老婆、妻子を養うに百姓地もなく、いつぞやは五番目の赤子を間引きせんとするにおよんだことを聞き及びました。身命第一の藩主様のご慈悲ご人徳をあまねくこの岩月村にもおよんでいることを肝煎の身として領民に知らしむるべく、行いの本とするにはと考えた末、法度破りではありまするが五郎太を金海鼠扱いにつかいました。」

川辺はじつと目をつむった。金海鼠の不審は消えていない。しかし、このような無辜(おこの百姓どもが藩主様のお心を支えとして生きていることに儒学における君子の徳の遍く広まり、辺境の岩月村でも行われている篤行に感動を覚えたのである。川辺は半時も目をつむっていたであろうか。口を開いた。

「余は、この計量御影石数十年も使いたして塵芥(ちりあくた)付きて重さ増してしもうておることに考え及ばなんだ。金海鼠の何処もの違いであれば大業なことであり藩主様にも申し開きがたたぬところではある。わずかの違いはきつと塵芥の軽さの違いであろう。本日の計量吟味は沙汰止みとし、今後は毎日の計量を新しき

御影石を使用し、毎日奉行に報告することを命ずる。」

川辺の立ち去る後ろ姿を清右衛門以下は神仏を拝むようにして見送った。川辺の去った後に安堵と何となく爽やかな空気が漂った。しかし、五郎太だけは違っていた。清右衛門の申し開き、川辺の裁きを耳にし心に深くし自分の行為の恐ろしさを知った。清右衛門と二人だけになった時に五郎太は

「肝煎様……」

と涙顔で言いかけたが、清右衛門は

「今後とも、よく働きたまえ。」

とのみ言って立ち去った。その後は新しい計量石が使われ、しかも微塵の違ひもなく藩主そして江戸幕府に納められたという。この長年の功労で清右衛門は、船荷取引の御判形(許可証)をいただくこととなり、さらに千苅田屋敷は栄えることとなった。

それからである。面瀬川に砂金がある。尾崎、千岩田の浜で砂金がとれたと言われるようになった。これが五郎太の流した砂金か、もともと金取の金山から流れ出たものかは誰も知らない。ともかくも誠実ということが人間の大本であることは、このことから教えらるるのである。



▲砂金写真▲